

□海外文献紹介□

大腸憩室と腺腫および癌との関連

Assosiation of colonic diverticula with adenomas and carcinomas: Morini S, et al(Dis Colon Rectum 31: 793-796, 1988)

症状のある大腸憩室症患者 150 人について、大腸の adenoma や carcinoma の発生頻度が対照群に比して高いかどうかを検討した。対象は症状を有し内視鏡で大腸憩室症と診断された 150 例で、男性 88 例、女性 62 例、年齢は 40 歳から 92 歳(平均 57 歳)であった。一方、対照群として同じ時期に腹部症状を訴えて大腸内視鏡検査を受け、憩室のなかった 1,300 例の中から性、年齢を合わせた 150 例を選んだ。大腸憩室症 150 例中 143 例は S 状結腸、および

下行結腸に、7 例が右側大腸に憩室が存在した。54 例(36%)に他病変が併存し、13 例に癌、42 例に腺腫が合併していた。対照群では 150 例中 26 例(17%)に癌または腺腫が発見されたのみで、両群間には有意差があった。

次に、癌と腺腫を分けて比較したところ、腺腫はそれぞれ 27%、10%に認められ、両群間に有意差があったものの、癌に関しては 9%および 7%と有意差はなかった。次に、年齢別に各々の群を 50 歳未満と 50 歳以上の subgroup に分け、腺腫、癌の頻度の比較を行った。まず 50 歳未満では、憩室症のある群では 29%、ない群で 12%であった。50 歳以上では、それぞれ 35%、18%という結果であった。つまり、50

歳以上で大腸憩室症のある症例は、特に腺腫または癌の合併頻度が高いということになる。

最後に、性別で両群間に差があるかどうかを調べた。統計学的には、男性では大腸憩室症のある群に有意差をもって腺腫または癌の発生頻度が高かったが、女性では差がなかった。この研究が最終的な結論として強調しているのは、症状のある大腸憩室症症例には、大腸の腺腫または癌の合併が高いものの、別々に検討すると腺腫の合併が高いために有意差があるのであって、癌の合併が高いわけではないということである。(愛知県がんセンター消化器内科

白井正人 抄)